



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 0 月 1 6 日 (木)

発行 館長 加 藤 智 一

熊による被害が増加する理由

2025 年、日本各地で熊による人身被害や農作物への被害が急増している。特に東北地方や北海道では、春から秋にかけて例年の数倍にのぼる出没件数が報告され、住宅地や公共施設にまで熊が現れる事例が相次いでいます。

その理由として第一に挙げられるのは、熊の餌不足です。熊は秋に向けて冬眠の準備として大量のエネルギーを蓄える必要がありますが、近年はブナやミズナラの実、ドングリなどの堅果類が不作となっています。具体的には、天然ブナ林が県森林面積の約 22% を占める山形県の場合、2025 年の調査で、山形県最上郡鮭川村と酒田市を結ぶ与蔵峠を除く全調査地点でブナの凶作が確認されました。この傾向は今年に限ったことではないらしく、2023 年から 2024 年にかけての凶作も深刻だったことから、熊は山中で十分な栄養を得られておらず、人里にまで餌を求めて降りてくるようになったと思われます。また、北海道ではヒグマの重要な食料源であるカラフトマスやヤマブドウの減少も報告されており、これも熊の行動範囲を拡大させる一因となっているようです。

次に、考えられるのは、気候変動の影響です。温暖化により冬の気温が高くなり、熊の冬眠期間が短縮される傾向にあり、これにより、冬季でも活動する個体が増え、従来は安全とされていた季節にも熊との遭遇リスクが高まっているというのです。また、猛暑や異常気象により山中の水源や植物が枯渇し、熊が低地や市街地にまで移動せざるを得ない状況も生まれているようです。

さらに、人口減少と高齢化による里山の管理不足も深刻な問題です。地方の過疎化が進む中、耕作放棄地や手入れされない森林が増加し、熊にとっては隠れやすく、餌を得やすい環境が形成されています。人間の生活圏と野生動物の生息域の境界が曖昧になり、熊が人里に出没する機会が増えているのです。加えて、狩猟免許を持つハンターの高齢化と後継者不足により、熊の個体数や行動範囲を適切に管理することが難しくなっています。

また、近年特に問題視されているのが「アーバンベア」の存在です。これは、人間の生活圏に慣れ、警戒心を失った熊のことで、住宅地のゴミ置き場や果樹園、畑などを餌場と認識し、繰り返し出没するようになります。こうした熊は夜間だけでなく日中にも活動し、人間の行動時間帯と重なることで接触



事故のリスクが高まっています。実際、山菜採りや農作業、通学中の児童が襲われる事例が全国で報告されています。

行政の対応にも課題があります。熊の出没情報の共有が自治体間で十分に行われておらず、広範囲に移動する熊の追跡や早期対応が困難となつてはいないでしょうか。また、熊の捕獲や駆除を担う人材や装備の不足も深刻で、特に山間部の小規模自治体では対応が後手に回っているようです。さらに、住民の危機意識の低下も問題です。今でこそ、ほぼ毎日熊による被害、出没情報がニュースになっていますが、ゴミの管理や屋外活動時の注意が不十分な地域では、熊との遭遇リスクが高まります。

このように、熊による被害の増加は、自然環境の変化と人間社会の構造的変化が交錯した結果でもあります。単に熊を「駆除」するだけでは根本的な解決にはならず、餌資源の管理、里山の再生、狩猟制度の見直し、住民教育の強化など、多角的なアプローチが求められています。熊との共生を目指すには、自然と人間の関係性を見直し、地域社会全体で持続可能な対策を講じていく必要があるのです。

